20250330 受難節第４主日礼拝

司式:佃　雅之
奏楽:中井喜久子

前奏：「いと愛しまつるイエスよ」(J.ブラームス)

招詞:主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに。主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。(イザ55:6.7b)

讃美歌17「聖なる主の美しさと」

交読詩編145:14-21

14 主は倒れようとする人をひとりひとり支え/うずくまっている人を起こしてくださいます。
15 ものみながあなたに目を注いで待ち望むと/あなたはときに応じて食べ物をくださいます。
16 すべて命あるものに向かって御手を開き/望みを満足させてくださいます。
17 主の道はことごとく正しく/御業は慈しみを示しています。
18 主を呼ぶ人すべてに近くいまし/まことをもって呼ぶ人すべてに近くいまし
19 主を畏れる人々の望みをかなえ/叫びを聞いて救ってくださいます。
20 主を愛する人は主に守られ/主に逆らう者はことごとく滅ぼされます。
21 わたしの口は主を賛美します。すべて肉なるものは/世々限りなく聖なる御名をたたえます。

朗読聖書①マラキ書2:5-9

◆祭司への警告(後半)

05 レビと結んだわが契約は命と平和のためであり/わたしはそれらを彼に与えた。それは畏れをもたらす契約であり/彼はわたしを畏れ、わが名のゆえにおののいた。
06 真理の教えが彼の口にあり/その唇に偽りは見いだされなかった。彼は平和と正しさのうちに、わたしと共に歩み/多くの人々を罪から立ち帰らせた。
07 祭司の唇は知識を守り/人々は彼の口から教えを求める。彼こそ万軍の主の使者である。
08 だが、あなたたちは道を踏みはずし/教えによって多くの人をつまずかせ/レビとの契約を破棄してしまったと/万軍の主は言われる。
09 わたしも、あなたたちを/民のすべてに軽んじられる価値なき者とした。あなたたちがわたしの道を守らず/人を偏り見つつ教えたからだ。

朗読聖書②ルカによる福音書10:25-37

◆善いサマリア人

25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」
26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、
27 彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」
28 イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」
29 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。
30 イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。
31 ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。
32 同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。
33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、
34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。
35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』
36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」
37 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

祈祷

天地の創造主にして全能なり生ける真の神、あなたの聖名を褒め称えます。私たちを守り導いてくださる主よ、この新しい週の初めの日、私たちがあなたを賛美することから始められますことを心より感謝致します。今、この礼拝堂に集められた者、ライブ配信によって御前に跪く者、また、時を合わせて祈りを献げている者、これら全てあなたの民、キリストの弟子となった者たちであります。主よ、どうぞ、あなたの聖なる霊によって、礼拝者として相応しく整えてくださいますようにお願い致します。

受難節のこの時、主イエス・キリストが、私たちのために十字架に向かわれたことを鮮明に思い起こし、私たちが自分の罪の深さを自覚し、あなたの深い愛に救われて生きる者となったことを覚えることができるようにしてください。

全てを治め給う神さま。今、私たちの生きるこの世界は、武力による支配と破壊という最もあなたが望まれない状態が続いています。敵を憎むのではなく、敵を愛し、和解する道を歩み出すことができるようにしてください。あなたの愛に満ちた霊を、この世界に吹き込んでください。全ての物が、あなたが創造された愛と調和に満ちた世界へと立ち返ることができるようにしてください。

ミャンマーでは、大きな地震がありました。愛媛で、岡山で、韓国でも大規模な山林火災がありました。主よ、あなたの御力によって、地上の全てのところに平安をもたらしてください。今、不安の中にある人たちが、希望を見出すことができるように、世界の各地、また、日本にある全てのキリストの教会で福音を宣べ伝えている者たちを強めて、福音を大きなものとしてください。

憐れみ深き主よ、教会学校の働きを覚えて祈ります。主よ、この教会に集う子供たちを祝福してください。教師たちが良き備えをして、新しい年度を迎えることができますように、あなたが教師たちの働きを支えてください。教会学校が教会の伝道の業としての務めを果たすことができるようにしてください。

主よ、今年度の教会総会を守り導いてくださいましたことを感謝致します。あなたが今、この教会に与えてくださっています課題を、私たちが日々聖書に聞きながら、祈りつつ担っていくことができますように、長老会の働きを支え、教会に連なる一人ひとりを励ましてください。

憐れみ深き主よ、願いつつも、教会に来ることのできない私たちの愛する家族のために祈ります。今、病にあって、また高齢のために思い悩み、寂しさを覚えつつ、日々を歩んでいる者がおります。あなたが共にいてください。あなたの助けとあなたの癒しが私たちの友に注がれますように切にお願い致します。

私たちの主よ、今日、あなたは御言葉を取り継ぐ者として鮎川健一牧師を、この信濃町教会の講壇に立ててくださいました。鮎川牧師がこの教会に教師として召された日から三年、あなたは今日まで、様々なメッセージ

を私たちに届けてくださいましたことを覚えます。この礼拝は、鮎川牧師をこの教会から派遣することを覚えて献げられています。主よ、あなたの霊で鮎川牧師を満たしてください。説教を聴く私たちに、あなたの霊を注いでください。今日ここに語られます説教を余すところなく聴き取り、引き受けることができますように。この礼拝によって、私たちがますます御国を目指して宣教に励むことができるようにしてください。

これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌 466「山路こえて」

説教「隣人とは誰か」　　鮎川健一

年度末を迎えて、暦の上では疾うに春を迎えておりますけれども、これまでのところを見ますと、雪降り、寒さの残る日々がある中で、少しずつ春めく風の薫りを感じながら、草花の命の勢いを感じるこの頃にもなりました。

カトリック教会の暦では受難節第四主日、この日は『**レターレ・喜べ**』という名を与えられております。これは『**ローマの春の祭り**』に由来する習慣から、人々は花で自分自身を飾ったり、また花を贈り物としてお祝いをする日にもなっています。──この話は以前にも申したかもしれませんけれども、丁度この時にあたりますので、もう一度確認しているところですけれども──この日のミサでは、通常の典礼色にあたる紫の式服の代わりに、特別にバラ色の式服を着用する習慣が16世紀に始められた、そのような伝統を今も持っています。紫というのは悔い改めと感謝、あのアドベントの時と同じ典礼色になっているこの受難説です。いずれにしましても、この期間は、そういった意味において、信仰による神への服従、神からの約束の真理に従って歩む恵みに応えることを、悔い改めをもって思い起こすという時になっています。

今朝与えられた御言葉においては、子供でも心に深く残る譬え話ということになっています。主イエスが語られたことは実に単純明快です。しかし注意がかなり必要です。語る者も、“**この『善きサマリア人』のように生きているか？**”、このように厳しく問われますし、また聴く者は、“**そんなこと言われても**”と言い訳が浮かぶからです。主の譬え話は、常に真っ向勝負です。“**良い話**”ということでは済まないものです。常識化されたユダヤの差別社会で“**蹴落とされていた人たちが反対に助け手になっている**”という話ですから話の内容は単純とは言えません。

ある律法学者が主イエスに対して問いかけましたけれども、これは不必要なことでした。その腹積もりは、“**最近注目されているイエスというあの男を、どんな男か品定めをしよう**”と試みたということにあるからです。もし主イエスがまともに答えられなければ、そこから引きずり降ろされ、諸共、即座に石打の刑ということをなったでしょう。それを考えたわけです。そこで主は反対に問いかけました。それも主は単に文字面を問うたのではありません。もしまたそうであるならば、“**律法にはこう書いてある**”というふうに応えて終わりです。それでは知識の問題となってしまいます。知っているか否かを問うだけになってしまうということです。今でも聖書を勘違いして読んだり揶揄する人の中には、知識を持つことが最重要で、〇か×か、知ってか知らずか、覚えているか否かを問う律法学者と同じような心理があります。しかし、主は、“**あなたはそれをどう読んでいるか？**”と問われました。それは“**読んでいるか？**”と言われたとしても知識ではなく、“**神の言葉なる律法にどのように関わっているのか？**”ということ、“**あなたはどう生きているのか？**”そこです。

律法学者の答えはこうでした。27節「『**心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい**』**とあります。**」これは、『**マルコ福音書**』で主が律法学者から“**あらゆる掟の内でどれが大事でしょうか？**”と旧約に記されている律法の中で最も重要なものを問われた時と同じことです。となれば、です。律法学者は既に正しい答えを持っていたということになります。また、この答えは当時のユダヤ教の中では常識的なものでした。そこで主は答えます。「**正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が与えられる。**」“**あなたは正しい答えを知っている、それならそのように生きれば良い**”と、このように実に単純です。“**神を愛し、隣人を愛する、それが神の御心に適うことと知っているならば、そう生きればよい**”と伝えたばかりにあるわけです。

しかし、よくあることですけれども、人の話に突っ込みたがる者は、他人が分からないことを伝えるのではなく、単に自分の知識人ぶりや地位や名誉、また身分を売りたいがために受け入れの話であったり、また横取りの知識であったとしても、あたかもそれが自分の知識や生業としてそのことを言いふらすという態度を取ります。しかし、それが認められない、他人から受け入れられない、そうなってしまうとなれば、逆上して大騒ぎをその場でします。まるで暗記熱心な要領のいい子どもの駄々捏ね、そういったことがあります。答えもってもそれを充分に理解して活用することができないという未熟さということです。知っていても何もならない、ということです。この律法学者も同じです。

では“**私の隣人とは誰ですか？**”とさらに主に問いかけます。聖書では「**彼は自分を正当化しようとして**」、わざわざこう書いてあるわけです。彼にとって主なる神を愛するということは問題ではなく、それは昔から疾うに知っていると思っている、だからこそ聞く、ということです。そこで『**十戒**』の構造を見ますと、前半が神を愛すること、後半が人を愛すること、それは律法学者ならば百も承知だということ。それで彼は、なおかつ隣人を愛することについて問い質したということです。意味が分かりません。やる必要はないですね。

当時のユダヤ教では、隣人とはユダヤ人のこと、家族や親族のことを指していました。この枠が狭ければ狭いほど、この律法を全うするということが簡単になりました。もし主が他の律法の学者と同じように、はっきりと“**これです**”と言ってくれれば、彼は、“**自分はそのようにしています**”と答えたでしょう。また、“**隣人とはユダヤ人の仲間です。同胞です**”、と主が答えてくれたならば、“**どこまでの同胞か仲間か、家族や親族ならどの親族までか**”と、さらに問い続けたことでしょう。確実な答えがなければ律法を全うできない、そういうふうに、この律法学者は考えているわけです。ですから、その中での律法主義ということは、まさにこの発想や考え方です。法律の条文の解釈や様々な文章を見る時と同じになります。“**ここにこう書いてある、ここには書いていない**”と大騒ぎする。単にも字面を見るに過ぎないわけです。その奥にある意味、行間を見ない、知り得ないということです。書いてあるか、書いてないかで判断する、そうなれば律法学者そのものです。見える文字だけで判断したがるということになります。

主は、この譬え話で、隣人を限定してこそ神の御心を全うされる、ということは言っていません。そうではなく、また隣人を愛するというのは、

誰が自分の隣人か具体的な顔を浮かべるということではなく、出会う人に対して自分自身が隣人になるかどうか、その志があるかどうか、これを伝えたということです。神を愛しているならば、神から注がれている愛を具体的に隣人との関わりの中で注いでいく。そう生きるのが神を思う然るべき姿勢であるという譬え話です。神の愛、さらには愛そのものについて深く見る必要がありますけれども、ここでは時間がありませんので割愛します。

時代、地域が違う私たちでも、ここに出てくる祭司やレビ人の気持ちがよく分かります。実際、半殺しにあって道端に捨てられている人、**“ここで関わったら事件の証人として後々大変で面倒なことになる、それなら関わらないでおこう”**と思ったのでしょう。今でもある事態への理由付けは同じです。私もそういった経験がありました。時間がない、こうなったら困る、厄介だ、そういったことはよくありました。当時のユダヤ社会では、さらに半殺しにあった人が死んでいた場合、死人に触れれば穢れた者となり、もし祭司であれば、神殿での御用がしばらくできなくなる。また、単純には手間暇をかけられないということも理由づけできます。

しかし、サマリア人は、この人を見捨てることができない心に駆られたわけです。サマリア人、異邦人、混血人です。だからこそユダヤ人は嫌ったということです。この世の律法や制度に縛られていると誰しもがなるべく避けたいと思う事象です。しかし、程度の差こそあれ、主はこの世のしがらみに捉われている私たちの心の不自由さから身動き取れない状況下にあっても、そこからの新たな一歩を与えてくださったということになります。

実際、この律法学者は何が御心であるかを知っていました。しかし、そう生きることができない、その理由は「**何をしたら永遠の命を受け継ぐことができますか？**」というこの問いに明らかな根拠、生きる術が表れています。**“何をすれば”**と問いました。自分は正しい律法の専門家だから律法を守ることで自分を認められると考えているゆえです。そもそも彼は、自分が罪人であるとは微塵も持っていません。彼は神の言葉を知識として知っていたけれども、これに打たれ、自らの罪を知らされ、主に憐れみを希うということは知らなかった。つまり、言葉の知識があったとしても、そこには信仰がなかったということ。彼は日夜、聖書に親しみ、言葉を受け止め、知識において神を愛し、自分は偉い人と自負していました。これこそ神に認められるというふうに彼は思っていたわけです。

よく耳にする話には、教会に来れば幸せになる、良い人になる、祈れば守られ叶えられるなど、切りがないほどの方法論というものが騒がれます。しかし、このような表面的なことが常識化、絶対化されてしまうとなれば、他の倫理思想団体と同じになってしまいます。何かをして喜びや満足を得る、上から目線的に**“こうしてあげている”**、**“こうしたのだから、褒められ、許され、認められる”**、そういうことで生きがいを持っている精神構造です。

しかし、聖書が指し示す**“神を愛する”**ということは、全く異なるわけです。それは、**“愛されるはずもないこの私が愛されている”**という驚くべき神の愛に打たれ驚愕し、そして、主を褒め称える中で新しく生まれてくる神との関係が与えられる。この神の愛に打たれたものを**“自分のように隣人を愛しなさい”**というこの神の言葉の前に、新しく与えられた神からの使命に、喜びと感謝をもって従うしかありません。

これは倫理、道徳、地位や名誉のための知識言質では守れない姿です。もしそうでしか救いが与えられないとするならば、いわゆる知識人、財閥家、さらには聖書をよく知っている人、また献金を多く献げている人、その人たちしか救われないという教えになってしまう。教会が胡坐をかき、主イエスも富裕層、知識人のみに近寄って彼らを呼び集め、そして彼らのみを愛するということに留まってしまいます。

そこで真剣にこの譬え話を聞くというふうになれば、自分はこの半殺しの人を見過ごしていった祭司であり、レビ人だと思うのではないでしょうか。そして、善きサマリア人のように生きようと考えることでしょう。しかしです。それも正しい読み方と言うふうに思うんでしょうけれども、またそうならば、単に先ほど申したように倫理、道徳、そういった生き方に留まる可能性があります。それは、信仰的な生き方というふうまでにはなり得ません。ここで完結しては、**“そうは言っても”**、という理由を避けることが出来ないからです。できるかできないか、知っているか知っていないか。そういった問題になっちゃうわけです。

そうでなく、この話を何度も聞く中で、キリスト者の中には、また自分は駄目な人間だ、善きサマリア人のように生きなければいけない、しかしできない。そういう葛藤に駆られ、自責の念に駆られ、信仰に見切りをつけてキリスト教会から離れ、信仰を捨ててしまう、そういったこともあるわけです。また、そうであれば、元々の志に正しい信仰があったかどうかが問われます。いずれにしましても、このような思いを持っている人が多いものです。

しかし、主が話をされたのは、この律法学者や私たちの中にある言い訳、これを避けるためだったということを受け止め、決して忘れてはならないということです。これも決して道徳・倫理的にではなく、あくまでも信仰の問題です。ここで半殺しの目に遭って道端に捨てられていた人こそ、実は私たち自身である、ということです。そうであるならば、善きサマリア人は誰でしょう。主ご自身となります。私たちは人を助ける者である以前に、主によって解放され拾い上げられて助けて戴かなければならない者だということです。

この善きサマリア人のように生きたたら身がもたない。むしろそう生きることは物理的、精神的に不可能です。私いやというほど知らされています。生身の人間です。**“あれをやれこれやれ、そう出来ないならば……”**そう言われても、24時間起きてはいられません。手足が限られています。知識も頭の限界もあります。**“あれやれこれやれ”**言われてもできません。体がこうなってしまえばなおさら、その意味を分かってくるものですけれども、だからこそ、そういった人たち、そういった状況になる人たちのためにも、主は十字架の上で死んだ、死なれたということです。その主が私たちに向かって「**行ってあなたも同じようにしなさい。**(37節)」と言われます。この言葉は主の十字架の御業と切り離せません。私たちのために十字架の痛みを負ってくださった主の御言葉です。これは**“わたしに従って来なさい・わたしに倣うものとなりなさい”**ということと同じです。私たちは、この言葉が主の言葉であるが故に、弱い自分の心を主の御前に差し出して**“主よ、赦してください。この言葉に従って生き抜く力と勇気を与えてください。”**そう祈りをもって応えていくしかない者です。

この戒めに対しては、ただ悔い改めと祈りによって応えるしかありません。主の御教えは、できるはずもない戒めを私たちに強いたのではなく、厳しくもある真実なる生き方を行える力をも与えてくださる、それが御霊

なる神の力です。神を愛することを可能にするのは、この御霊の助け、支えによって与えられている確かな証拠、福音の力です。ここに福音に生きる者の新しい歩みがあります。

私たちは朝毎に、神に愛されている喜びの中で、自分のことしか考えない罪を捨て、主の御言葉に生きる者とされていきます。ここには体や身分、能力の分け隔ては一切ありません。また、そのような考え、謀(はかりごと)の入る余地はありません。共々に主に支えられ、生かされているわけですから、夫々が与えられた姿、仕方において主に応えていく、という中に喜びがあります。学問の知識が有るか無いか、また社会地位がどうのこうの、体の状況が何であれ、そういったことは主の御救いの業とは全く関係ありません。夫々が主に従って繋がり、互いの祈りがあっての信仰生活、教会生活です。そこから私たちはエクレシアなる信仰共同体たる教会に集められ、ここから派遣され、生ける神と共に、多くの人との関わりの中に生き、そして生かされていくものです。

主の福音は互いに責め合い、自らを責めるためにあるのではなく、主にある信仰の自由へと、また喜びへと招くためにあるわけです。使徒パウロは人の救いに関する象徴的な言葉でこう表現しました。**『使徒言行録』**にありますけれども、「**闇から光に(使26:8)**」ということです。クリスマスの時によく使われる言葉ですけれども、「**闇から光に**」、こう表現しました。主の御栄光に目を開かれたキリスト者は新しい創造の御業における新しい光の存在として徴が与えられ、またその徴となります。

私たちも真の信仰者として造り主なる神の御子を通じて示された、この救いの御業である十字架の真実を受け留め、そして**“主の御国が来ますように”**、こう日々祈りつつ、福音宣教の業に励みたいと、志を新たに進みます。

祈りを献げましょう。

呪いの木に架けられ、私たち罪人の贖い主となり給う御子イエス・キリストの父なる御神さま、主の恵みに与り感謝致します。しかしあなたが、この世を造られ、大いなる出来事を示される中でも、この世は多くの暗闇に包まれています。教会の働きを清め、正し、力を得させてください。あなたは現に多くの罪の中にある者を贖い、また猶予をもって一人ひとりを生かしておられます。どうか、約束された御子イエスの、父なる神の御霊によって、あなたに忠実に仕え、また証人(あかしびと)として雄々しく立つことができますように。何よりも、あなたに心を向ける喜びの中で、天上に連なる望みを得させてください。

この世に真の光に来ることを祈り願いつつ、主の平和を願う諸教会の祈り、また信仰の友の祈りに合わせ、尊き主の聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讃美歌 458「信仰こそ旅路を」

献金・感謝・主の祈り(橋本義武)

主なる神さま、聖名を賛美致します。夫々の場よりこの朝(あした)、御前に集められ、あなたの御言葉を聴くことができましたことを心より感謝致します。

御言葉を与えられて、また私たち、私たちの隣人の所へ遣わされて参ります。あなたによって、様々な軛から解き放たれて、あなたの望まれる業を、御心に適った業を出していくことができますように、私たちを強めてください。

鮎川先生が、この信濃町教会の務めを終えられ、また新しい教会へと遣わされて行かれます。これまでの歩みを感謝し、また、これからの歩みが、あなたによって祝福され、また力づけられるものでありますように、心よりお祈りを致します。

今、私たち、御前に、あなたから与えられた物をお献げ致しました。どうか清めて、あなたの御用のためにお用い下さい。主の祈りを共に祈り、新しい歩みを始めさせてくだい。**「主の祈り」**…アーメン。

讃美歌：88「心に愛を」

派遣：主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わされていくあなた方一同とともに、今も後も永遠にあるように。アーメン。

報告：週報の訂正「洗足木曜日祈祷会4/17(木)午後7時礼拝堂」

後奏：「我ら汝に感謝しまつる、主イエス.キリストよ」(J. S バッハ)